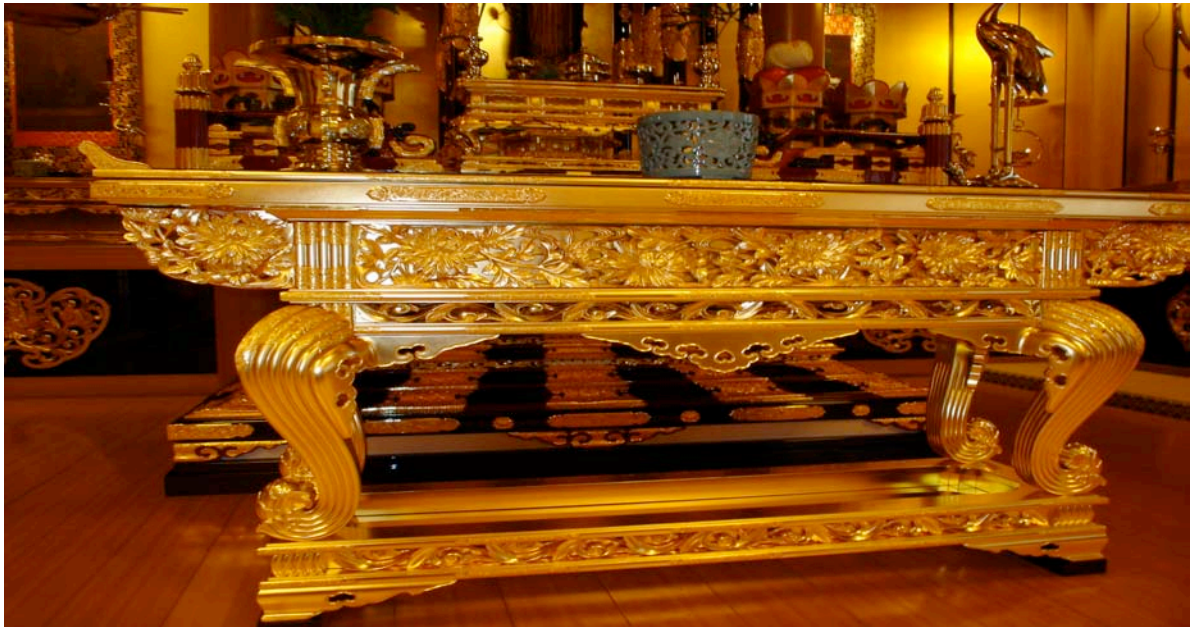


郷音

こ う る

流

第50号 2007年3月1日発行



あらたに、ご修復された前卓（まえじょく）と上卓（うわじょく）

今、悩みを軽くする本が氾濫して

います

人間がきちんと悩まなくなつた

せいです

悩むときは しっかり悩み

魂を成長させ続け 本当の人生

の意味を把握してください

精神科医

人間は

死を抱いて生まれ

死をかかえて成長する

信国 淳

修正会（しゅししょうえ）

本年も元旦午前11時より修正会をお勤めいたしました。

お勤めの後、私たちは教えによって気づかされる、常に間違っっていくが、そのことから気づかせてもらおう、迷ったら迷ったところに戻らせてもらおうことができる。そういう意味であらためて私たちの軌道修正の歩みを、年の始めに確認させていただきうとお話しさせていただきました。

引き続き、福田総代の乾杯で坊守手製のおせちをいただきながら、おとそをいただきました。本年も宜しくお願いいたします。



春のお彼岸会

今年は、異常なくらいの暖冬で何回も桜が咲く頃のような気温になる日がありましたが、暑さ寒さも彼岸までといわれるよう、いよいよ春になりました。彼岸―彼岸です。煩惱でよごれきった此岸（この世）に対して、彼岸、つまり、清らかな浄土の世界を示す言葉です。

七高僧の一人善導大師の『観経疏』に「その日、正東より出でて、直に西に没すればなり。弥陀の仏国は日の没するところにあたりたり」とあるように、彼岸には太陽が真西に沈むことから西方十万億土といわれる浄土をしのぶという習慣が古くから定着してきました。

「観想」といって真西に沈む太陽の彼方にあるお浄土を、心をこらして観じようとする行です。お彼岸の中日と前後三日を含めて七日間は、浄土をしのぶ期間として、ずっと私たちの生活に定着してきました。

お彼岸にお墓参りをするのは、清らかなお浄土に往生（往きて生れる）された先祖をしのんで行われるようになったのです。

ですが、せつかくお参りされても、お墓だけで阿弥陀の浄土を莊嚴（おかしり）した本堂にお参りされないでは本末転倒といわれても仕方ありません。21日のお中日には彼岸会法要があります。どなた様も先祖を大事にするということの意味は私もまた、清らかな浄土を観想して、本堂²に還るところを明らかにさせるといふことなのです。

おそろいでお出かけください。

彼岸会法要

3月21日（春分の日）
午前11時半から正午まで

※これまでどおり、ご自宅にもお参りに伺っております。個別に連絡いたします。

いのちのふれあいゼミナール

2006 vol. 2

海法龍氏（三浦組 長願寺 住職）

昨年6月に続き、9月に行われたゼミナールの法話ダイジェストをお届けします。

聞法の背景

このようにご縁をいただいております。このように「聞法」或いは「聞思」といいます。「法」というのは教えということですから教えを聞く、そして聞いた私たちのものの考え方が確かめられていくということ、聞思と言います。

聞法、聞思という形で私たちが仏法を聞かさせていただくようになったというのは、背景といたしまして縁があるわけです。先祖代々真宗の寺の門徒だったということもあるでしょうし、お祖父さんお祖母さんやご両親が熱心だったということもあるでしょう、身近な方が亡くなったことやお寺との縁ができて、親鸞聖人の仏教のお心を初めて聞いて、非常に心に響いたという方もいらっしゃるのではないかと思います。それぞれの出遇ってこられた、触れてこられた背景があるということをお考えください。

もあれば受け継ぐことが危うい状況の中でも伝承されてきて、今日私たちに縁ができていくのではないかとお考えください。

お釈迦様が教えを説かれて、その教えがまともな日本を経て、2500年の時を経て私たちに伝えられてきたわけですね。親鸞聖人が2011年には750回忌を迎えますので、親鸞聖人のご縁の中で我々の先祖・先輩たちもそれぞれの中で触れ合い出遇い、そして大事に思い、それを我が家の中心としてお内仏（仏壇）を具え、その生活を中心にしてお念仏を大事にして伝えてきたという流れがあります。

仏教はお釈迦様から始まったと一般には考へるわけですが、そのお言葉の道理はお釈迦様から始まったというよりも、人間にとつて非常に大事な道理、生きていくうえで大事なことが記されております。但し、それは文字としては成り立っていないかもしれないかもしれませんが、お釈迦様以前にも仏教という名前がなくても、そのお心、願いというものはずっと伝わってきたのではないかと、それが意味では親鸞聖人の歴史観でもあります。

そうすると私たちがこの命が終わってもそのお言葉のお心というものはずっと絶えることがない。つまり人類が滅びるまで、我々に向

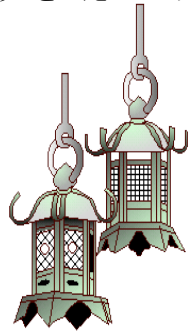
けて仏教の、お釈迦様の示されたお言葉というものは我々にずっと用きかけていく、そういう内容を持つているのだということをお考えください。そういう意味で「終わりなき歩み」ということを感じさせていただいているわけですね。

そして、そのお心が具体的に証しされていく場は、私たち一人ひとりのところに証しされていくわけですね。ということは伝えていく責任、出遇った者の責任が実は私たちにあるということをお考えください。

伝承と己証

永い時を経て伝えられてきました。伝えられていくときには必ず、「承」という字は「聞」の謙譲語で「うけたまわる」ですから「聞いた」ということがあります。聞かなければ伝えられないということですね。何を聞いたか、「伝承」と「己証」といいます。「己証」だから「己が証しされ」といいます。親鸞聖人に「明証」というお言葉があります。明らかに証しされていく、つまり自分自身がそこで明らかに証しされていく、自分自身がどういう風に自分の人生を生きるのかということ、教えに聞く、仏教のお心に触れることによって我々自身がそこに明らかになっていくということです。

その明らかになつていったということが私たちの大きな「悦び」ということです。喜悦きえつといい、非常に悦びとなつていくことだということです。大事なことを教えられて「ああ！よかつたな」と思うとそれを自分の子どもたちにも知つてほしい、大事にしてほしいということが必ず出てきます。つまり、私の中に、私自身が聞いたものを必ず次の世代に伝えていきたいという願いが生れてきます。仏様の教えは、「願い」です、本願ともいいます。仏の願いを聞いて、そして自分自身



の姿を教えられて、人間の在り方を教えられて、大事なことを教えられて、「ああよかつたなあ」というときは必ず伝えていきたいという願いになつていく。願いは願いを生むというのでしょうか、それが人間の自然な姿です。

私たちの先祖・先輩が、真宗門徒が大事にしたものが伝承されてきたのです。浄土真宗の門徒は何をしてきたかというとお参りして、お勤めをして、聞いてきた。それをその後語り合つた。昔は「談合」といいました。今は良い使われ方はしません、話し合いのことを談合といひ、談合して確かめ合つたのです。自分で聞く

と自分の考え方で聞くでしょうか？そうするとみんな業が違い、人生が違い、生きてきた経験が違うから聞き方が違うのです。同じことを聞いても10人が10人の受け止めが出てくるのです。他の人の話を聞くのは大事なことです。それを聞くことで自分の受け止めが深くなります。これが談合の大事な意味です。それが真宗門徒のひとつの生活スタイルで、そうやって受け継ぎ伝えてきたわけです。

今はお話を聞くということがとても少なくなつた。するとその願い、教えということが、一体私にとつてどうなのかということがなかなか伝わっていかない。伝えられていくことが難しくなってくるのです。自分がいいと思わなければ子どもに伝えようとは思わないでしょう。自分が大切だと思つたからこそ、伝えていこうという積極的なものが出てくるわけです。つまり聞いて己が証しされたという実感が必要ならば伝えることは難しいのです。

ご先祖を大事に、お墓を大事にということは言われますが、現代は合理主義的な傾向が強くなり、むしろ自分の今の生活を大事にという時代です。自分さえよければという時代であります。そういう中で自分の背景とか繋がりとということが希薄になつていきます。

けれども、一見そうですが、占いなどが流行

る時代ですから、前世とか靈魂という関心はともあるのです。今まではお寺という人物だつたけれど、それが違う人物になつたということです。歴史的に続いてきたものが淘汰とうたされていくというか、だからこそ、そこに伝えられてきたものは何かというものを、愈々いよいよはつきりさせていかなければならないということを感じます。

かくれ念仏の伝承

私は熊本の天草の寺の出身です。天草といえは有名なのは「かくれキリシタン」ですが、実は浄土真宗の門徒の多いところなのです。この夏、天草からはそれほど距離は離れていませんが鹿兒島に獅子島ししじまという島があり、そこにある親戚の寺に行く機会がありました。台風によつて庫裏が倒壊したため、2002年に創建120年を記念して門徒会館を建設し、その落慶法要の記録を見せてもらいました。

薩摩藩は江戸時代に念仏禁制という宗教政策を行いました。つまり浄土真宗を信仰してはならない、親鸞聖人の念仏が280年間禁止されてしまいました。浄土真宗の門徒の人たちは強制的に信仰してはだめだと言われたわけです。けれども、上から言われて「はい、やめます」というわけにはいかないでしょう。そこで

地下に潜って、隠れて念仏の信仰を大事にしてきたので「かくれ念仏」というのです。信仰をしているということがわかると斬首、つまり死罪です。信仰をしている者がいるかいないかを調べるために検問し、疑いのある人には拷問をして吐かせたのです。例えば本山報恩講にお参りに行ったことが密通される、そうすると斬首です。京都にお参りに行っただけで首が飛ぶわけです。信仰するということが非常に命がけとなっていたのです。

明治9(1876)年に念仏禁制が解かれるまでずっと隠れてお念仏の心が伝えられていたのです。280年間伝えてきたというわけです、考えられないというか信じられないという思いです。柱の裏側をくり抜いたところに阿弥陀様をご安置し朝夕取り出して、また、人形の裏側に南無阿弥陀仏と彫ってそれをお参りのときにはひっくり返してお参りしていた。一軒の家だけだとなかなか伝えられていけないから、何軒かその地域の家が集まって、家だと危ないというので、人里離れた「ガマ」とよばれる洞窟に集まってお参りをして、伝えられてきたことを確かめたのです。

念仏禁制が解かれたときに、他県の僧侶が鹿児島にお寺を造ろうと大勢鹿児島に入



っていきました。天草の私の実家の四代前の住職の弟、海法秀もその中の一人でした。天草は肥後の国だが天領でした。薩摩にお念仏のお寺を建てようと船で鹿児島本土を目指していたが嵐を避けるために獅子島に立ち寄ったところ、熱心な「かくれ念仏」の人たちから、何とかここにお寺を建ててほしいと懇願され、建てたお寺がそのお寺なのです。

「薩摩藩は慶長2(1597)年藩主17代島津義弘が一向宗の禁制(真宗の信仰を禁止する)を行い、明治9(1876)年9月5日「鹿児島県の各宗の儀、爾今人民各自の信仰にまかせ候」この一片の布達が出るまでおよそ280年の間真宗の教えを信心することを禁じた。しかしその間、へかくれ念仏」として命を懸けて念仏の教えに生きてきた人々がいた」と落慶法要のパンフレットに記されています。

台風で倒壊した庫裏から当時の書類「新寺建立願」が出てきて「鹿児島県薩摩の国出水郡獅子島村、右の場所に今般新寺建立したい」と明治15(1882)年に申請されています。真宗大谷派の末寺に加わりたいその理由は、明治13(1880)年3月より来島し、人々と交流、百戸ほどの真宗の帰依の人がいる「彼らは従前よりこの島に寺院無きを深く遺憾に存じ、何卒一寺建立して永久に説教聴聞いたした

く希望の者少なからず」とあります。280年だから10代にわたって伝えてきて、禁制が解かれ天草から坊さんが来たので、ぜひ建ててほしいといったのです。それもすごいのですが、「永久に説教聴聞いたしたく」法話を聞きたい、聞く場所として寺を建ててほしいと要望があり、それに応じて建てようという話なのです。

「目録書」には土地、本堂・庫裏があると書かれ、経済的な背景が無ければ維持できませんから「永続方法書」が添えられ、そこには田畑、山林、米三石、麦一石、薪百、信徒百名より施入物があり、そのお布施で、米で、麦で、そして山林や田畑の作物の収入を以って創建したいと書いた上、連署で署名捺印してあります。これを見たときに真宗のお寺がどういう願いで建てられてきたかということがよくわかります。「永久に説教聴聞をする」、これだけしかないと思います。永久に説教聴聞するためのお布施であり、経済であり、それが真宗のお寺のすべてです。坊さんが言ったわけじゃなくて、教えを聞いた方々が要望してくださっているのです。

信仰する、手を合わせるといふことは何かという、自分たちが法を聞くためにあるのだという。これも永久にです。永久ということでは自分だけのためじゃないということ。自

分さえ救われて、自分だけわかればいいというのではなく、次の世代も次の世代もこの教え、法に、念仏の心に触れてほしい。そういう願いになっていくわけです。だから獅子島という島の280年間培ったものが、一人ひとりに教えに出遇ってよかったなあというものがあ、そしてまたそれを伝えたいというものがあ、承といふことは聞いた私たちが、ああそうだなあ、と頷くということがなければ本当の意味で伝わっていかないのです。

自身を破る声

伝えられてきたのは南無阿弥陀仏というお念仏です。南無阿弥陀仏と書く文字だけでは、言葉です。言葉の本質は声です。親の念仏する声を聞いて、その声が周りの人に響いて聞こえて、自分たちもそのお念仏の心をいただいてそれを声に出して、そういう伝承です。手を合わせてナンマンダブ、ナンマンダブと言うのは、自分だけのためじゃないから声に出すことは大事なのです。次の代の人、周りの人に響いていく、そういうことが声ということで示されているわけです。

教えというものが言葉、声となって響くのです。声となって聞くのです。文字は読むと私

ちは頭で解釈してしまいます。だから自分の域を出ません。知的欲求の満足になるかもしれないけれどそれ以上ではないのです。文字は大事だけれども、文字だけだと観念化してしまいますから大事なことは声として聞くということです。だから、もつとお寺に来てお話を生で、声で聞くということが非常に大事なことです。

なぜかという声には私たちの考え方の枠組みを破って、超えてく



る響きがあるからです。だから經典の言葉は「教言」というわけです。教言の言葉です。浄土真宗の「宗」は私たちの中心ということです。私たちが何を人生において大事にするのかということ、依り所ということでしょうか。自分たちのものの考え方、自分たちの経済的なこと、そんなことを自分たちの中心にしたわけじゃない。念仏の心を自分たちの中心においたということです。念仏の心は何かとお念仏の言葉、声、それを自分たちの生活の中心においたのです。中心を聞くということです。

だから、そのことを明らかにしてください

方を私たちは宗祖親鸞聖人というわけです。一派の宗祖という意味で使っている訳ではありません。人生の中心をこの教えに触れて見出した方というわけです。これが宗という意味です。教言、言葉、お経の言葉、「南無阿弥陀仏」の言葉、それは真言ともいいます。

えらばない きらわない 見捨てない

『勤行集』の83頁に「聖句」とありますが、これは親鸞聖人の主著である『教行信証』の序文になります。そこには仏教の、浄土真宗の、南無阿弥陀仏のお心のエッセンスがすべて出ています。「誠なるかなや、撰取不捨の真言」あります。真言というのは、真実の言葉ということなんです。教言の言葉というのは真実ということなんです。私たちに教えてくる、聞いてくるんです。「撰取不捨」すべての人を撰め取って見捨てないということ、言葉を換えると選ばないですべての人を救うということです。この真実の言葉はどんな人にも通じていきます。賢いから受けとめられる、賢くないから受けとめられないということはありません。男とか女とか、子どもとか大人とか、或いは、この民族だからということはありません。「えらばない、きらわない、見捨てない」と、竹中智秀先生（前大谷専修学院院长）が仰っておられます。すべての人に、

平等にこの教えが伝わっていく、響いていきま
すということを表すわけです。

『正信偈』に「重誓名聲聞十方」とあり
ますが「聲」というのは声の旧字です。南無阿
弥陀仏という名前が十方に聞こえると書いて
あります。「聞十方」、十方だから聞こえない
ところはないということ。その声の内容は
「撰取不捨」だれも「えらばない、きらわ
ない、見捨てない」ということです。私たち
は「えらばない、きらわない、見捨てない」
と聞かされていくわけ。私たちが仏さまの心
に響いていくわけ。我々が仏の心に響いて、
私たちが、実は撰取不捨じゃないということ
を言葉から教えられていくのです。言葉とい
うのは用きですから、真実の言葉に触れて大
事なことを教えられていくわけ。

「超世希有の正法」世を超えろということ
はこの世だけじゃない、この時代だけじゃあ
りませんということ。過去世から未来世まで、
すべての人々に、十方に、えらばないで、見
捨てないで、きらわらないで、このお言葉が
響いてきますよということなのです。だから、
真言と違って、真言宗はもう意味が違っ
てきているのです。真言宗は全部呪文になっ
てしまっています。その心を聞くということ
はありません。祈禱仏教になってしま
いました。親鸞聖人のいう真言とは中味が違

ます。それは本来の意味に返って、声に出した
ことがそのまま私たちの耳に入ってくるとい
うことです。私たちは「帰命無量寿如来」とお
勤めし「ナンマンダブツ、ナンマンダブ」とお
念仏を称えます。それは自分の耳に入ってきた
す。だから、お勤めするということの中に「聞
く」という意味が入っているのです。声は聞くた
めにありますから声にしなければ聞くとい
うことにはないのです。

つまり、仏さまの
世界から私たち
に呼びかけられ
ているわけです。



言葉となって呼びかけられているわけです。

呼びかけるといことは、必然的に相手の存
在をそこに認めるということになります。「お
早う」「今晩は」と呼びかける時にはそこには
相手がいます。響き合いです。言葉を交わさな
いということとは相手を無視することです。そう
すると孤独です。疎外感です。言葉をかけあ
う世界というのは豊かです。言葉をかけない世界
は荒んでいきます。だから、言葉をかける声とい
うのはとても大事なのです。

違ういい方をすれば教言、教えの言葉、真実
の言葉、それを仏言、仏語、仏さまの言葉とい
うことです。仏さまのお心を示すために私たち

にわかるように、人間の言葉にして表現してく
ださっているわけです。お釈迦さまのことを仏
陀といういい方をしますが、仏陀は“Buddha
”と中国で音写されました。音を写して
漢字を当てはめたので漢字に意味はなく
“Buddha”に意味があるわけで「覚者」、目覚
めた人ということ。眠るといことは何も
わからないという状態で、目覚めたとい
うことはわかったということを表すわけ、これも譬
喩です。「自らに目覚める」で自覚者とい
うことです。それを覚りというわけ。気づいた
人というわけです。気づかなかったのは眠っ
ているということ、目が開いたということ、そ
れを“Buddha”というわけです。

そうすると仏語というのは目覚めの言葉と
いうことです。それを私たちが聞くとい
うことは、我々に目覚めを促す言葉とい
うことです。私たちが仏さまの言葉、教言を聞くとい
うことは我々自身が目覚めを促されてくるとい
うことです。目覚めといことは、気づかされてく
るといこと、気づかされてくるといこと
は促される。仏語を聞いて何に気づかされ何に
目覚めさせられていくかという、先程い
ました「撰取不捨」。「えらばない、きらわ
ない、見捨てない」自分たちの現実が縁があれば、
見捨てる、きらう、えらぶ在り方だとい

知らされてくるのです。【以下次号】

住職テレビ出演？

半年以上前のことですが、住職がテレビに出ました。といっても、台東ケーブル・テレビなのですが、台東区の緑化フェアにぜひ話を聞かせてくれというので、取材がありました。

このたびの建物の修復のときに、断熱、そこから省エネのことなどで屋上の一部を緑化したのです。区から助成金も出たので引き受けました。

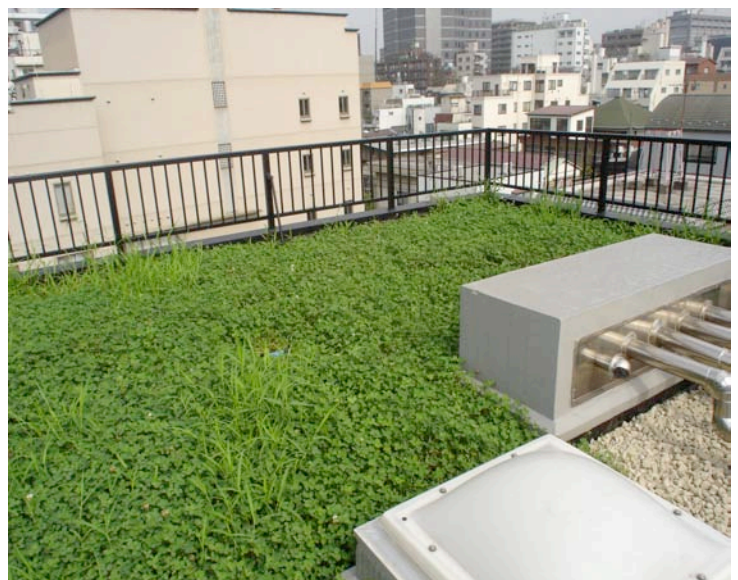
ヒート・アイランド現象に少しでも役に立つならということも勿論ですが、要は夏の寝苦しさを少しでも解消したいという、エアコン無しで過ごしたいという私の欲から始まったことです。

とはいえ、ここ数年の集中豪雨や爆発低気圧といわれる異常気象は何か大きな変化が起ころうとしているようであり不気味です。アル・ゴア元副大統領が講演されている資料で数十年前氷河だったところが融けて、現在湖になっていたり、キリマンジャロの雪が極端に少なくなった比較した写真を見ると、地球温暖化が確実に進行していることが一目瞭然で紹介されています。毛利衛さんは「懸念されているといわれている」とテレビCMで曖昧な言い方をしていますが、これはやはり私たち人間の活動・生活が引き起こしたことだと見るほうが正確でしょう。

そこで、屋上緑化ですが、いっしょに太陽光発電も考えたのですが、なにより、日本は電力を買う制度がなじんでいなく、ドイツのように高く電力会社を買っていません。また、助成金があるといっても、イニシャルコストはかなり高額になります。近くのお寺さんでも導入しているところがあるので聞いてみたところ、たいした発電量にはならないということでした。

また、西光寺の建物自体にも問題点があり、それは、屋上として歩行することを前提に構造計算をしていないのです。これは、先代が特に地震による被害ということをやかましく指示していたので、屋根は軽くするというコンセプトで設計していたのでした。通常1平米当たり180もしくは240kgくらいの重量で構造計算するところ90kgと大柄な人間一人分くらいの重量しか耐えられないということが判明したのです。したがって発電用パネルは重量があり、設置できないという結論になりました。

さらに、それだけの耐加重ですと、大雨のとき水の重さだけでも相当量になるということで、敷き詰める土の分量も制限されました。そこで、廃ガラスを高温で焼いた多孔質の、要するに軽石ですが、それ自体の比重は軽く、なおかつ水分を保持する能力のあるもの、それもリサイクル品ということですのでそれを全面に敷き詰めています。



同じようなもので、今行われている本山の修復で、使用できない瓦および葺土をイナックスで、あまり高温だとリサイクルの意味がないと(エネルギー消費が多い)いうことで蒸し焼き状態にした「ソイルビーンズ」というものが商品化されています。しかし、これは蒸し焼きですから比重が重く屋上には使用できません。地下墓地の玉砂利および、湿度の高い時期に一部で結露が見られますので、その部分に使用しています。できるだけ廃棄物を出さないという本山の願いに呼応し

た形で導入いたしました。残念なのは、重量の問題で雨水タンクを設置できないということ。将来的には本堂の裏手に雨水タンクを置き、その水を屋上まで汲み上げるポンプをソーラー発電で作動できるようにはしたいと思っています。

話を戻しますと、断熱および、防水のため現在クローバーが一面に咲いています。防水も心配したのですが、勿論通常の防水工事をした上で耐根シートで根が進まないようにしています。また、防水の効果が切れるのは紫外線によるものになりあるということ、そういう意味では直接紫外線にさらされる部分が少なくなることはメリットと考えました。クローバーは三年すると自家中毒で生えなくなりますが、三年かけて土を良くして行こうという考えです。

区内の門徒さん、近くのお寺さんや花屋さん等から「任職、テレビ出てたね！見たよ」と声をかけられました。いやー恐い恐い（笑）。

そのとき話した内容は次のようなことです。

空き地が原っぱになり、やがて林にそしていつかは森になることを遷移（セイ）と言います。人間が種を蒔いたり植えたりしなくとも自然に育っていくメカニズムを取り入れた屋上である、ということですかね。

簡単に言えば、植物や動物が互いに助け合って育つ様に組み合わせをしている事、だから、そんなに手間をかけなくても済むし、せっかくな来た動物を葉殺する必要もないわけです。と言うよりも多様性が必要なので、ほっておくのが一番良く、収穫だけしてあげれば、手入れになるわけです。

鳥は食事に来たり恋をしたり、もしかするとマイホームの物色にも来ているのかもしれない。枝振りの良い植物やもう少し大きな水場があると、来てくれる動物が増えさらに緑地が安定してくるそうです。

いのちはすべてに影響しあっているということが、本当に教えられます。何一つ無駄なものはないということをお教えてくれます。お釈迦さまの最初に説かれた「縁起の理法」、すべては業縁存在であるということの一端を教えられたように思います。

ある時期、鳥がたくさん来て手ずりは糞だらけになります。鳥の糞の中にあつた実から芽を出して、楓や月見草、紫蘇などが混ざって生えています。勿論根を張ると厄介なイネ科のものや繁殖力の強いセイタカアワダチソウなどが風に運ばれて芽を出しています。



また、花が咲くとミツバチがたくさん来てミツを吸っています。そのおかげかどうか、上野・谷中に多くいるカラスは西光寺の上も飛んでいます。屋上ではほとんど見かけませんが、糞をみると鳥の種類は分かるようですが、カラスは来ていないようです。

設計してくれた方によると、同じ時期に施工した板橋区の小学校ではかなりの野菜が収穫されたそうです。もうすこし土が盛れれば枝豆くらいできたかもしれません。少し残念です。

スパイラル・ゾーンには虫除けのハーブを

御仏具のご修復

先般、仏具のご修復は終わり、建物の補修が予算以上にかかったため、墓地の外壁が残っていますとご報告したばかりですが、隔月に行っている西光寺の聞法会（偶数月の第三土曜日・だれでも参加できます）に来てくださる方から、ご修復した須弥壇と宮殿よりも以前からあった仏具、特に須弥壇と宮殿の前に置く「前卓」^{まえしよく}、「上卓」^{うわしよく}がくすんで見えるようになりましたねという話が出て、親鸞聖人の御遠忌に併せて、こちらもきれいにしたいですねという意見をいただきました。

そこで、予算は完全にオーバーですが、この時期にご修復しようと思いい立ち、昨年の報恩講をお勤めしてから、京仏具の犬塚さんをお願いを致しました。2月20日に見事にご修復なつたことです（表紙参照）。

本山両堂のご修復

右記、西光寺創建400年と併せてお願いをいたしました本山御影堂・阿弥陀堂のご修復懇志は一部を残してほぼ完納です。金額に関わらずお納めいただいた、すべてのご門信徒様に感謝いたします。

およそ百年に一度の大修復、先祖代々から真宗門徒の帰依処（きえしよ）としてのご本山は、我々自身の自覚で守りしたいものです。本当にありがとうございます。

なお、あらためてご依頼はいたしません。が、まだお志をとお願いの方は、超過しても結構です。お声をおかけください。

お墓の花立について

墓地の掃除については住職・坊守でさせていたいております。

以前から、プラスチック製の花立が、紫外線や経年変化による分子の劣化で、墓石から外れるお墓が見受けられます。墓地の施設等は寺で管理していますが、墓石等はそれぞれでお願いいたしております。その際は、ステンレス製の取替えをご案内しています。費用は一万円です。該当される方はご検討ください。

また、最近、黙って墓地だけお参りして帰られる方を見受けますが、西光寺では（浅草のお寺もほとんどがそうです）昔から、お寺で線香としきみをお渡しするというスタイルを守っております。お参りの際は必ずお声をかけてください。
※本堂にもお参りいたしましょう。

墓地外壁改修工事終了

亀裂があり倒壊の危険性のあつた壁を改修しました。予算がなく後回しになっていましたが、このところの金属価格高騰を受け実施しました。老朽化した部分を除去しコンクリートを打ち増し、自重の軽いステンレス製にしました。直下型地震でも耐えられると思います。

お願い

予定された工事及びご修復は終了いたしました。門徒の皆様には長い間ご迷惑をおかけいたしました。

なお、ご懇志の「お申込み」をいただいでいて、まだご入金をいただいでいないご門徒様、現在分割でお修めいただいでいる門徒様におかれましては、今後ともご進納のほど、何卒宜しく願ひいたします。